

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520289

研究課題名（和文） 中国近代書論の文献学的研究

研究課題名（英文） A Philological Study of Modern Chinese Theories on Calligraphy

研究代表者

菅野 智明（KANNO CHIAKI）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授

研究者番号：90272088

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来知られてこなかった近代中国の書論を、内外の図書館・博物館等から発掘し、文献学的な検討を加え、影印・翻刻によって公開し、以後の書論研究の礎を築こうとするものである。3年間にわたる調査により、特に後述の九件の書論文献について、主要部分の翻刻・公開と、書論史的跡付けに関する基礎的考察を試みた。今後も継続的に調査を進め、調査文献の集成を目指したい。

研究成果の概要（英文）：This study aims to establish a foundation for the future study of theories on calligraphy by bringing to light not commonly known modern Chinese theories on calligraphy held in libraries and museums in Japan and abroad, philologically examining them, and publishing the materials as photocopies and reprints. During three years of our survey, most of the content of nine such documents on calligraphic theories have been reprinted and published, and a basic consideration toward a retrospective look at the history of theories on calligraphy has been made. In the future, we intend to continue our research to create a corpus of surveyed literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：中国書学・中国書法史

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：書誌学・文献学、書学・書法史、中国近代史、芸術学、美術史

1. 研究開始当初の背景

(1)近代書論研究の現状

書論とは、広義では書芸術に関わる理論全般を指すものであり、詩論や画論、楽論と並

んで、中国の文学・芸術理論の一翼を担うものである。

従来、近代中国を射程とした書論研究は、必ずしも十分な成果を挙げてきたわけではない。それは、近世以前の書論文献の整備に

比べ、近代のそれが著しく立ち遅れていることに起因する。こうした整備の立ち遅れは、近代書論の絶対量の不足を意味しない。逆に、その量は膨大であると考えられる。だが、大半のそれは、現下容易に閲し得ない稿本や零細な定期刊物、あるいは書作品（拓本も含む）に直接書き付けられた題跋などを主とし、その調査・発掘に相応の労力を要することが、その立ち遅れにつながっているようである。

(2)従来の書論集成

内外の研究を顧みるなら、旧来通行した『美術叢書』『芸術叢編』などの芸術文献集成を補うべく、『歴代書法論文選統編』（上海書画出版社、1993）、『明清書法論文選』（上海書店出版社、1994）、『歴代筆記書論彙編』（江蘇教育出版社、1996）などが近代書論の翻刻に一定の成果をあげているが、収録に至る文献は、やはりごく僅かにとどまる。一方、内容の公開には至らぬものの、近代書論を調査した文献目録の類も、『中国美術期刊過眼録』（上海書画出版社、1992）、「1900-1949書学論文目録」（『中国書学論著提要』成都出版社、1990）、「近現代中国書法史文献目録」（『近現代書法研究』安徽美術出版社、1997）など若干ながら備わっている。しかし、これにしても、各図書館・博物館等を体系的・網羅的に調査した成果とは言い難く、偶存の文献に依拠した恣意性は否めない。

2. 研究の目的

(1)研究の基本方針

以上の状況を踏まえ、本研究では、上記の目録に収録されながらも、内容が未公開の書論文献、更には、上記目録類にも収めされない希覯な文献の発掘・公開を目的とする。具体的には、内外の主要な図書館・博物館等を实地に調査することによって、まず対象とすべき書論文献を探る。次いで、形式や体裁、あるいは出版や来歴などに関する書誌学・文献学的な事項に検討を加え、更には、それを撮影のうえ「新獲近代書論集成（仮）」として、影印または翻刻によって公開することを目指す。

調査にあたっては、図書館・博物館単位に、つとめて体系的な調査を期す。そのための方策として、各図書館・博物館の所蔵目録類を予め实地に調査し、対象文献について刊本、稿本、期刊、そして書作品・拓本附載の題跋などといった文献の種別を設け、既調査・未調査が明瞭になるよう工夫する。今回は、本国における中国国家図書館、上海図書館、浙江図書館、国内における京都大学人文科学研究所などを主たる調査機関とするが、いずれにおいても、上記の要領で、かつ所与の条件の範囲内で対象文献を確定する。

(2)研究の特色・意義

本研究は、未周知の書論を公開することから、近代書論研究の基盤整備として、極めて重要な役割を果たすことは、改めて言うまでもない。その際、書論文献に題跋類をも含め、それを積極的に公開してゆこうというのが本研究の大きな特色である。書論は、図書・雑誌の体裁をとる文献のみならず、書作品（もしくは拓本）自体に直接記された、題跋にも、優れた内容を有するものが少なくないからである。現下、梁啓超の題跋を網羅的に影印した『梁啓超題跋法書墨蹟書法集』（栄宝齋、1997）や、朱翼庵のそれを影印した『欧斎石墨題跋』（紫禁城出版社、2006）など、論書家単位の題跋影印集が出版されつつあるが、こうした肉筆の影印によって、活字に翻刻されたものでは窺うことのできなかった情報（例えば改稿経緯など）が、種々発見されることもある。本研究は、こうした肉筆題跋を重視する。

更に本研究は、単に書論研究の基礎となるのみならず、中国近代の書作品研究および書作家・鑑賞家研究に資することも附言しておきたい。特に題跋類は、それが附された当該書作品の評価史・鑑賞史を最も雄弁に物語るのであり、また、鑑賞者がそうした題跋を記したことは、その鑑賞者の実践的な伝記史料ともなるわけである。こうしたことから、本研究では、その成果が作品論や作家・鑑賞者論に発展的に援用されることを、大いに意識している。

3. 研究の方法

(1)予備的検討

各年度ともに、实地調査に先立ち、事前に以下の点について準備を進める。

①関連諸資料の収集整理（中国近代書論関連文献の購入）

各調査機関が公表している目録類や図録類、その他、近代書論に関する先行研究の収集。所属研究機関における既存の当該関連資料は乏しく、新たに種々の資料を購入する必要がある。

②調査対象候補の洗い出し

上記の購入資料に基づき、おおよその調査対象候補を絞る。最終的な選定は、各調査機関において实地に進めるが、この時点では、特に優先して調査すべき重要な対象を検討しておく。

(2)調査

海外渡航の調査については、2007年度は北京市・国家図書館、2008年度は上海市・上海図書館、2009年度は杭州市・浙江図書館を中心に進め、国内の主要な書論文献所蔵

機関の調査も、並行して行う。調査に際しては、特に以下を重視する。

①書誌の記録

法量、材質、形状に関するデータの他、書誌にかかる出版年や出版地、丁数や版式などの基本データを記録する。鑑蔵印、題跋等の有無も確認する。

②撮影および複写（機材の購入・準備）

撮影範囲、複写機使用の可否等について、当該機関の指示を仰ぎ、可能な限り全影を収めることにする。

(3)考察

調査した文献について、以下の手順で考察を加える。

①データの整理・目録化

調査によって得た採録データ（画像データを含む）を、書論別に区分し、目録を作成する。

②各書論の文献学的検討

上記のデータに基づき、執筆・出版年や出版地が判明していないものは、その推定を行う。また、刊行本については、版式や装丁を手がかりに、同類の出版物も探り、出版事情を窺う一助とする。

③翻刻・釈読

調査文献は、下記の公開を念頭に置き、基本的にいずれも翻刻する。肉筆題跋は、行・草書体を使用する機会が多いので、その際は、まず翻字から着手する。活字本でも、白文の場合は標点を施しつつ翻刻する。

④関連事項の考察

当該書論の執筆者に関する伝記資料や著書の収集。その執筆者に異なる書論が備われば、それとの比較検討も視野に入れる。肉筆題跋については、その執筆者の基準作とすべき書跡との比較によって、その真贋も検討する。また、当該跋の附される書作品については、他の附載跋や鑑蔵印を手がかりに当該遺品の通蔵も考察する。

4. 研究成果

(1)恵兆壬『集帖目』（中国国家図書館蔵）について

所謂「法帖」を著録化する動きは、清朝後半から活発になってきたが、こうした法帖著録は、多くが未刊の稿本にとどまっており、それらの史的回顧は、現下ほとんど未着手の状態である。標記の恵兆壬『集帖目』も、そうした稿本の一つであり、今般の国家図書館における同書の調査により、以下の点に検討を加え、同書をめぐる新たな知見を提起し得た。この成果は、法帖著録史研究が、向後展開するための足がかりとして、一定の意義を有するものと考えられる。

①書誌

法量、綴法、書葉版式、構成、鈐印などの

諸点について確認し、これが、陸家振の筆による抄本であり、また王懿榮の序も王自筆であることを明らかにした。

②序、凡例、目録の翻刻と伝来

同書における上記の部分を翻刻し、そこから窺われる内容を、関連の事跡と照合させつつ、同書の原稿が、恵と直接交誼のあった徐康にわたり、徐の歿後に陸潤庠・家振父子に伝えられた可能性が高いことを導いた。

③『集帖目』の背景と書学史的位置

恵の伝をもとに、彼が金石・善本にかかる目録学に精通し得る環境にあったことを明らかにするとともに、この著録の凡例から、恵の編纂意図を解釈し、同書が金石著録との密接な関わりを意識しつつ網羅主義的な方針で編まれたことを確認した。さらに、その方針が以後の法帖著録の展開にあっても先駆的な発想となったこと、また、同書によって金石学が帖学に影響を与えた確たる例証が得られること等の点に、同書の書学史的位置を指摘した。

(2)翁方綱『化度寺碑考』（京都大学人文科学研究所蔵）について

翁方綱が歐陽詢の化度寺碑を高く評価したことは、彼の「化度勝體泉論」や、彼所蔵の化度寺碑拓（現・大谷大学蔵）に記した夥しい題跋からも如実に窺われるところである。しかし、彼の書法史観における化度寺碑の位置については、不明な点が多い。標記『化度寺碑考』、特に所収の「化度寺銘筆法攷」は、この問題の鍵を握る書論であり、ここでは以下の点の検討を通して、従来判然としなかった、翁の大局的な書法史観と化度寺碑の関係について明らかし得た。この成果は、今後の翁方綱書論研究においても、資するところは少なくないと考えられる。

①書誌と伝来

各種データの採録により、この本が、翁の門弟の李彦章による校訂を経たもので、後に曹秉章に通蔵されたと見られ、次いで松本文三郎元東方文化研究所長の有に帰し、現蔵に至っている点が明らかにされた。

②「化度寺銘筆法攷」の翻刻と論及字例各本対照表の作成

翻刻に際しては、内容上のまとまりによってI～V、A～Xの符号を附した。このA～Xは、化度寺碑の各文字単位に原拓・旧拓の状態を説明するものであり、主要な字例について、翁方綱本、顧從義本、王孟揚本の三種の拓から抽出し、比較対照表を作成した。

③『化度寺碑考』と翁の書学

上記を踏まえた分析により、この書論が、種々の古典における佳拓を閲する中で、改めて本質的な部分で化度寺碑を評価すべく生まれたことがわかった。そこでは、化度寺碑を礼器碑や樂毅論とともに相対的に広い書

法史の中に位置付け、この三者に復古性と革新性の兼備を称えて「至」品としており、この点が翁の所説において傑出するものであることを指摘した。

(3)翁方綱『縮本唐碑』跋(中央美術学院蔵)および翁方綱『明拓齊修孔子廟碑』跋(個人蔵)について

書における北碑の重要性を、南北書派という二元的な書法史観から明瞭に提示したのは、阮元である。阮の北碑観については、近年、彼の先達である翁方綱が影響を与えたとする説が提起されている。果たして翁は、阮を先導する有力な北碑観を持っていたのか、この研究では、上記文献ほか、翁の北碑論の網羅的な収集と分析によって、翁に強い北碑重視の説は窺えず、むしろ晋唐中心主義的な翁の書法観に、阮が反発的な意識を持する中で北碑を高めていたことを明らかにした。このことは、上記(2)の成果とともに、今後の翁の書論研究に資するのみならず、清朝後期の碑学の形成過程を窺う上でも、その基盤の一端になり得ると思われる。具体的な検討点は、以下のとおり。

①翁の北碑論の収集・整理と『縮本唐碑』跋の翻刻

先ず、既存の翁の文集等から北碑に関する言説を洗い出すとともに、そこに収録されない錢泳『縮本唐碑』へ寄せた翁の跋は、ともに存する阮元跋とあわせて翻刻し、これらの総合的な比較検討から、翁が晋唐書法に比して、北碑を格別に評価してはいないことを明らかにした。

②『明拓齊修孔子廟碑』跋の書誌と翻刻

こうした中で、翁が北碑中、最も高く評価した一つが、北齊乾明の孔子廟碑である。ここでは、従来回顧されることがなかった翁跋付き同碑拓の商務印書館における影印本(民国18年)より、翁跋を翻刻・分析し、その評価根拠が、同碑が晋から唐への「つなぎ」としての役割を果たしている点に見出され、北碑固有の書法は、何ら評価されていないことが判明した。これを踏まえ、北碑重視の主張は、やはり阮説を起点とすべきで、翁から阮への連続的な北碑評価の推進を見ることに、否定的な見解を提起した。

(4)『匊齋藏碑跋尾』(上海図書館蔵)について

清朝の掉尾を飾る收藏家、端方は、青銅器・石刻・書画など各方面で自蔵品の著録化にも精力的であった。しかし、彼の碑拓に関する著録は、これまで全く知られておらず、その碑拓收藏の実態も、十分に解明されてこなかった。今般、上海図書館で調査した『匊齋藏碑跋尾』は、その内容から、端方收藏碑拓に諸家が寄せた題跋の集録といえるもの

であることが判明した。この著録は、彼の碑拓收藏の実態を解き明かす鍵となるのみならず、彼が幕に擁した鑑定家たちの活動状況を知るうえでも、極めて重要な手がかりとなる。今般は、以下の検討により、同書の編纂事情や收藏著録史的意義、そして端幕における各鑑定家の活動時期などを明らかにした。端方コレクションは、現在も国際的に高い評価を受けており、彼の存在は近代收藏史において不可欠である。今般の検討は、既往の評伝とともに、そうした彼の收藏をめぐる基礎研究の一翼を担うものと考えられる。

①書誌

各データを採取するとともに、この著録が二人の書写者による抄録本であることを明らかにした。また、近代に刊行された端蔵碑拓の影印本との比較から、この著録は、題跋の原件を直接抄録した可能性が極めて高いことを指摘した。

②著録史的位罫

この著録は、同一種碑刻でも拓本によって資料性が異なることを重視しており、かかる同碑異拓を別項立てする方針は、旧来の題跋著録に窺われない。そこにこの著録独自のスタンスを見出した。

③主要端幕鑑定家

この著録に録される題跋の寄稿者は、各題跋の款記から、時期的に二つのグループに別れ、各時期において、主導的地位にあった端幕鑑定家が存在したことを導いた。

(5)陶澐宣「宋元祐秘閣本晋唐小楷跋」について

清末の北碑派書人、陶澐宣は『稷山論書絶句』(未刊)を草した書論家でもあり、菅野は、これまで、この書論が時に活発化した北碑の理論の動向を窺う上で、極めて重要な役割を果たしている点を唱えてきた。陶には、更に未刊の稿本『稷山文存』があり、ここにも、『稷山論書絶句』と密接に関わる重要な書論が録されている。すなわち『稷山論書絶句』起草の直前に執筆された「宋元祐秘閣本晋唐小楷跋」である。この研究では、以下の各検討を通して、この跋が、「宋元祐秘閣本晋唐小楷」帖の收藏者、翁同龢に対し、陶が書学者としての自身を積極的にアピールする目的が存していたことを指摘するとともに、それが、続く『稷山論書絶句』の起草の呼び水となったこと、更に『稷山論書絶句』で十分に展開されなかった独自の「互証論」が備わること、などを明らかにした。陶説は、未刊であることもあり、従来、近代北碑論の研究において閑却視される傾向にある。ここでの検討は、かかる現下の北碑論研究に対し、新たな視点を投げ得たと考える。

①書誌と翻刻

当該跋所収の『稷山文存』における各デー

タを採録し、これが陶の自筆稿本であることを確認するとともに、当該跋の全文を、附載する翁方綱跋とともに翻刻した。翻刻に際しては、この跋が六朝書論の評語を多数引用していることに鑑み、それぞれの出典も添えた。

②「宋元祐秘閣本晋唐小楷」帖の来歴と陶跋の背景

当該帖の実際とその伝来を、翁方綱跋や、翁同龢の日記などから辿るとともに、菅野の既往研究も踏まえ、陶がこれを開した経緯を見通した。

③陶跋の書論史的位置

直後に執筆された『稷山論書絶句』との比較により、「互証論」については、却って陶跋に踏み込んだ説が認められる点を導き、それが往時の北碑論を見渡しても、一頭地を抜くものであることを指摘した。

(6)『校碑随筆』褚德彝眉批本(上海図書館蔵)、楊宝鏞『觀古碑法』および同『古碑古拓説明』(ともに浙江図書館蔵)について

清末に著された方若『校碑随筆』は、碑拓の鑑定に関する先駆的専書として、現在でも不動の地位を築いている。しかし、従来その評価は、方の発想の独創に集中する傾向にあり、往時の金石学・書学界に、方に類する発想や学的基盤が共有されていたか否か、殆ど検討されてこなかった。今般、標記の三文献の調査により、『校碑随筆』に先駆け、或いは同時期に、碑拓の鑑定専著を試みる動きがあったことを明らかにした。この結果は、当時における金石学・書学界の層の厚さや水準の高さを示すものであり、こうした往時の埋もれた学的基盤への照射は、近代来の金石学・書学をめぐる学説史研究としての意義も、決して軽微ではないと考える。以下、この研究での主たる検討点を列記する。

①書誌と翻刻

標記三文献の書誌について、データを採録するとともに、『校碑随筆』褚德彝眉批本については、褚の識語の部分、楊宝鏞の二著については、序・後跋の部分、翻刻した。これらの翻刻部分は、いずれも方若の発想の独創を検証するうえで、鍵を握る言説が見られる。

②褚德彝の識語

褚は、自蔵『校碑随筆』に識語・眉批を記しており、その一節で、元来は王懿榮に碑拓鑑定の専著があり、端方を介してそれを知ったこと、また方若が王の遺著を購入していたこと、などに言及している。これらの証言は、諸事跡との対照から、極めて信憑性が高い点を指摘した。

③楊宝鏞の二著

この二著は、『校碑随筆』と殆ど同時期に著された碑拓鑑定書であるが、未刊である。その序跋および内容の一部の分析から、方著

の碑拓鑑定の方向性が、既に誕生当初から相対化されていた点を導くとともに、楊著に見る碑拓鑑定研究の今日的示唆についても論じた。

(7)今後の課題

今般は、時期的な制約もあり、その調査は当初予定していた体系的・網羅的なものにはならなかった。上述において、先学に「偶存の文献に依拠した恣意性」という弊を指摘したが、本研究もその轍を踏んだ感がある。今後は、更に調査の体系化を試み、「新獲近代書論集成(仮)」の成稿を目指したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①菅野智明、「宋元祐秘閣本晋唐小楷帖跋」小考、書芸術研究、査読無、3号、2010、51-72頁
- ②菅野智明、上海図書館蔵『匋齋藏碑跋尾』初探、中国近現代文化研究、査読有、11号、2010、1-43頁
- ③菅野智明、翁方綱の北碑観一兼ねて阮元説との関係に及ぶ一、中国近現代文化研究、査読有、10号、2009、1-26頁
- ④菅野智明、翁方綱『化度寺碑考』の再検討一京都大学人文科学研究所蔵本を中心として一、芸術研究報、査読有、29号、2009、1-10頁
- ⑤菅野智明、恵兆壬『集帖目』考一中国国家図書館蔵本を中心の一、書法漢学研究、査読有、3号、2008、28-39頁

[学会発表] (計5件)

- ①菅野智明、『校碑随筆』誕生の周辺、書論研究会関東部会例会、2010.4.19、六英社
- ②菅野智明、端方にみる翰墨の縁一碑帖鑑賞の幕友たち一、澄懷堂美術館・秋季特別展講演、2009.11.3、澄懷堂美術館
- ③菅野智明、上海図書館蔵『匋齋藏碑跋尾』初探、第1回中国近現代文化研究会大会、2009.8.29、大妻女子大学
- ④菅野智明、清朝書学の奔流、第5回四国大学書道文化学会記念講演 2008.11.23、四国大学交流プラザ
- ⑤菅野智明、恵兆壬『集帖目』考一中国国家図書館蔵本を中心の一、中国近現代文化研究会第65回例会、2008.3.23、大妻女子大学

[図書] (計1件)

- ①菅野智明、筑波大学出版会、近代中国の書

文化、2009、総 232 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅野智明 (KANNO CHIAKI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准
教授

研究者番号：90272088